

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.25 <在野>ということ

花井探嶺の紹介も本稿が最後となる（図1）。さっそく花井の晩年の作品を見ていこう。故郷の三重県を離れ、一所に定住せずに放浪を続けた花井だったが、1920年代半ばごろから1930年代初めごろまで、関東に居住して制作活動を展開したと考えられ、1932（昭和7）年に愛知県半田市の雁宿公園付近に移り、同年に龍泉寺（名古屋市中村区）の境内に《御花弘法大師》（台座を含む像高10m）を手がけている。さらにその翌年に白王寺（名古屋市中村区）に《十一面観音》（中村観音・像高8m）を制作するなど、1930年代までは比較的大型の作品が多い傾向をみせている。

そして1940年代には、愛知県常滑市山方町に移住したようだ。注目すべき作品は補陀落山大善院（ふだらくさん／常滑市・真言宗豊山派）に残る《平和観音菩薩像》（1942年）である（図2）。同作は台座を含む像高は3m30cmで、セメント製である。もともと同作は「忠霊観音」と称し、常滑の耐火レンガ製造業者である日本耐熱工業合資会社（設立当初は山本組と称した）が同社に関係した社員の戦死を弔うために同院へ奉納したものである。そして2006（平成18）年、造立祈願文に「世界平和」とあることから、《平和観音菩薩像》と改称し、「冬花庵観音堂」の本尊として安置されることとなった。冬花庵とは日本画家の橋本関雪の宝塚旧別邸の名称で、そのうちの画室を同院に移築し、それを冬花庵観音堂と称している。

花井は1950（昭和25）年に郷里の三重県菰野町に実母を弔う《観音像》を制作。これは花井の郷里の三重県に残る唯一の作である。戦後は大作が少なくなり、室内に置く飾り棚を好んで手がけた。そして1954（昭和29）年1月18日に花井は名古屋市中区替地町にて74歳で没した。幼きころより習得した左官技術と成人して身に付けた作陶技術の両者を融合し、仏像を中心に独創的な作品を生み出した点が花井の特徴である。

2019（令和元）年11月に大善院にて「没後65年 陶都に咲いた昭和の微笑み 花井探嶺展」が開催され、筆者は足を運んで《平和観音菩薩像》をはじめとする花井の作品を実見した。主催者である同院の住職・外山果見氏は、長らく花井に関する研究を続けてきた。外山氏は仏門に入った1983（昭和58）年に院内の仏像に「探嶺」の刻印を発見したのできっかけに探嶺の研究に着手、探嶺と常滑とのつながりを中心に調査を進めてきたという。その研究成果が展覧会で披露されたのである。

花井と常滑との関係性を探る外山氏の視点は重要だろう。花井は三重県三重郡菰野町で生まれ、兄にならって左官職人として修業し、青年期に常滑の陶器工場で陶芸の技術を修得したと伝わる。花井のバックボーンに左官や陶磁器の知識と技術があり、そこから派生して彫刻の道へ進んだ事実は非常に興味深い。良質の土を産出する常滑は、古来より窯業の拠点と

して著名であり、常滑焼は日本六古窯の一つに数えられ、その技術は現在にまで継承されている。常滑出身の彫刻家には、柴山清風（廉三）もいる。

花井の作品は東海地方を中心に残る。その東海地方では、浅野祥雲・山田光吉・後藤鉄五郎など、注目すべき造形家が活躍した。常滑焼や瀬戸焼などの著名な陶磁器産地を有する愛知県で、個性的な造形家が活躍した事実は、窯業とセメント美術との関係性を示唆する。彼らのような造形家の存在は、X（旧ツイッター）やインスタグラムなどのSNSを通じて、盛んに発信されている。SNSを経由したユーザー間のつながりも強く、SNSは情報交換の場になっている。身軽なSNSユーザーたちは、全国各地に足を運んで作品を実見し、撮影した画像をインターネット上で公開している。

また、彼らのような造形家の多くがいわゆる「在野」の出身である点は、見逃せない重要な事実である。彼らは東京美術学校を頂点とする近代日本のアカデミックな彫刻技術を教授する教育機関で専門技術を修得していないがゆえに、「在野」の存在として扱われる。そして大学や美術館などの研究機関に所属する「正統派」の美術史研究者にとって、こうした「在野」の造形家たちは「キワモノ」であり、研究対象からたちまち除外されてしまう。つまりは美術史上では語られない存在なのである。しかし筆者自身は、日本の彫刻の多様性を物語る制作者である「在野」の制作者を、日本の彫刻史を考えるうえで決して無視できない存在だと考えている。



図1 花井探嶺（57歳、天龍寺にて）

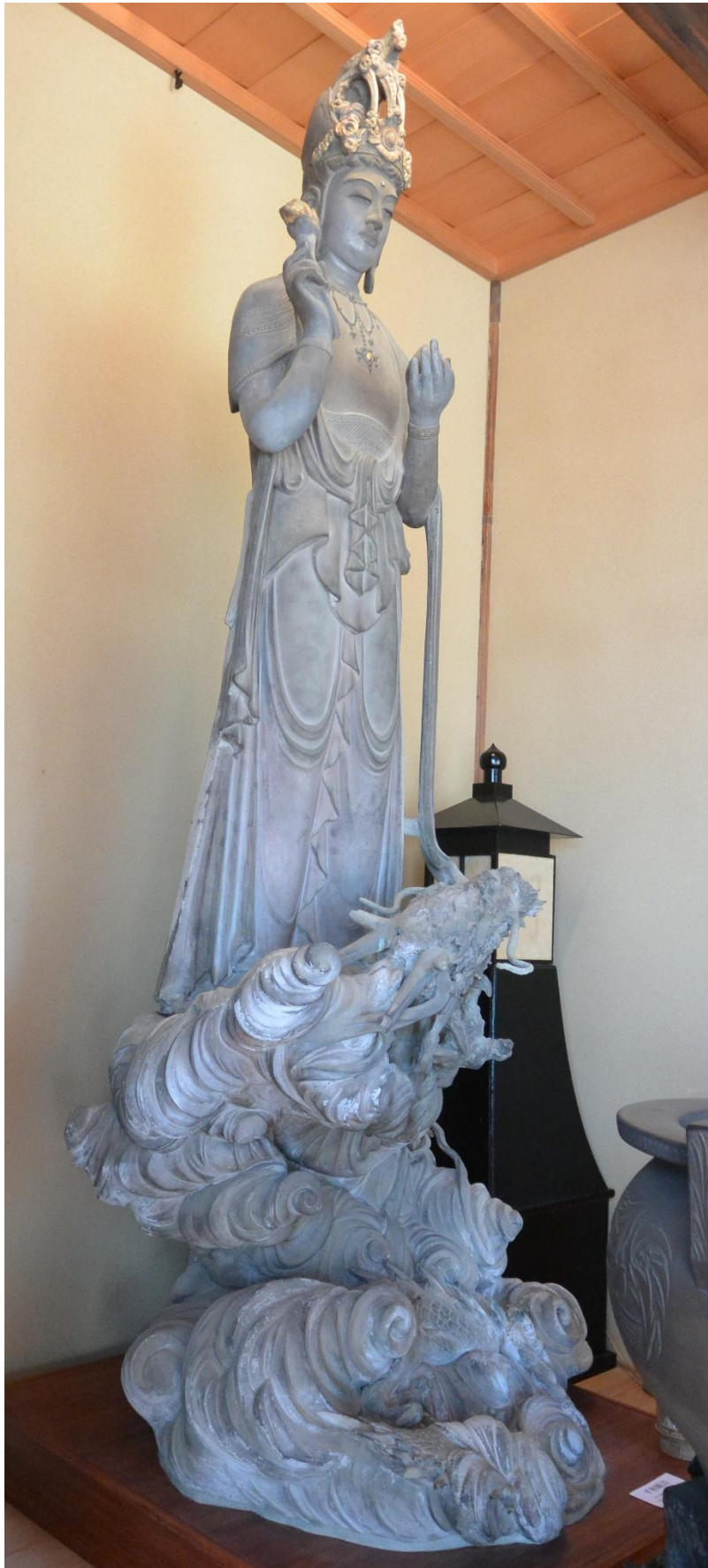


図2 冬花庵観音堂に安置される《平和観音菩薩》